

色染工芸学科の変遷；昭和 50 年代と平成

色染昭和 51 年卒(第三講座) 老田 達生

まず、私の略歴をご紹介します。私は、昭和 47 年 4 月に色染工芸学科に入学しました。昭和 51 年に無事卒業し(卒業研究は第三講座；寺村教授、林助教授、長野助手、清水文部技官)、そのまま大学院工芸学研究科色染工芸学専攻 修士課程に進学し、これも無事に昭和 53 年に修了しました。その後、京都大学化学研究所で博士号を取得後、昭和 63 年 10 月 1 日(平成が始まる 2 ヶ月前)に、私が以前に所属していた、寺村研究室に文部技官として着任しました。その日はちょうど、色染工芸学科、無機材料学科、工業化学科と閉学した工業短期大学部(夜間)の化学系(工業化学科と写真工学科)が合併して「物質工学科」が発足し(同時に大学院の工芸学研究科と繊維学研究科が合併され工芸科学研究科が発足し、さらに博士後期課程が開設されました。)、そこに赴任しました。赴任先は私が学生の時に過ごした研究室です。その後、同じ研究室で、助手、助教授、准教授(平成 19 年に改称。この時助教も新設されました。)、教授を経て、平成 31 年 3 月末を持って、すなわち平成を約 1 ヶ月残して定年退職いたしました。その間、京都工芸繊維大学は平成 16 年に「法人化」され、国立大学から国立大学法人(学校法人とは違うそうです)になり、それと同時に工芸学部と繊維学部が合併され「工芸科学部」が発足していました。すなわち、工芸学部はこの時消滅しております。また、物質工学科は物質工学課程に名称変更されています。さらに物質工学課程は、平成 30 年の再編で物質工学課程と高分子学課程の合併により「応用化学課程」が発足しております。私はその応用化学課程の所属で定年退職しておりますが、私の最後の年の平成 30 年度には、応用化学課程の学生は 1 年生のみで、2 年生以上には物質工学課程の学生が在籍しており、私はこの応用化学課程の学生と関わりを持つことなく退職しております。すなわち、私は物質工学科の発足とともに、母校に赴任し、それが消滅するとともに退職しました。平成の 30 年の間、我が母校に奉職させて頂いたこととなります。これが私の自己紹介です。

昭和 63 年 10 月に物質工学科が発足した時に、教員の所属は「物質変換学講座」「物質機能学講座」「物質開発学講座」と言う 3 つの大講座にシャッフルされて配属されましたが、ほぼ物質工学科としてまとまって活動していました。さらに、学部の教育コースとして「有機材料開発学講座」(色染工芸学科+閉学した工業短期大学の工業化学科と写真工学科)、「無機材料開発学講座」、「分子認識学講座」があり、従来の色染工芸、無機材料、工業化学の 3 学科の面影が残っていました。この面影は徐々に薄れ「物質工学科課程」としてまとまっていた。しかし、平成 30 年の「応用化学課程」が発足することで、ほぼ無くなりました。

以上で、京都工芸繊維大学工芸学部の色染工芸学科を含めた化学系 3 学科の流れもご理解いただけたと思います。

次に、私が学生であった時から、退職するまでの、色染工芸学科の各研究室の変遷を、そこに所属した教員の方々を紹介することで、説明させていただきたいと思います。それ以前（昭和40年代以前）のことは、分かりかねますので、ご容赦いただきます。

当時の色染工芸学科は4つの講座（研究室）がありました。その研究室ごとに説明いたします。教員の方が赴任もしくは退職（退官）された正確な年代の記録が見つかりませんでしたので、一部は曖昧な私の記憶をもとにしております。間違いが多くあるかも知れませんが、ご容赦下さい。

第一講座（染料化学講座—光機能材料学研究室）：

昭和50年代：野村 元昭 教授（平成4年定年退官）、山本 晃久 講師（色染 昭和14年卒、昭和57年定年退官）、福西 興至 助手（色染昭和37年卒、後に講師、助教授、教授の後、第三講座の教授に移籍、平成14年定年退官）、河野 充也 技官（昭和50年?着任、後に全学組織「高度技術支援センター」に移籍、令和初期に定年退職）

平成年間：野村元昭（前述）、福西 教授（前述）、三木 定男 助教授（後に教授、平成27年に定年退職）、桑原 正樹 助手（色染 昭和46年卒、後に講師、平成20年頃退職）、箕田 雅彦 助教授（後に精密有機材料学研究室を立ち上げて、教授として移籍、現職）、本柳 仁 助手（後に助教、精密有機材料学研究室に移籍、後に准教授、現職）

三木先生の定年退職に伴い、第一講座はほぼ消滅したことになります。

第二講座（精錬学・浸染学講座—材料物理化学研究室）：

昭和50年代：伊藤 泰輔 教授（平成6年定年退官）、木村 光男 助教授（昭和49年着任、昭和60年他大学に転出）、橋本 勇 講師（色染昭和24年卒、後に助教授、平成6年?定年退官）、乗 礼子 技官（昭和46年?着任、令和3年?定年退職）

平成年間：伊藤 泰輔 教授（前述）、梶原 莞爾 助教授（後に教授、昭和63年着任 平成14年退官）橋本 勇 講師（前述）、浦川 宏 助手（色染 昭和53年卒、昭和61年?着任、講師、助教授、教授を経て、令和22年新設の大学院「バイオベースマテリアル学専攻」に転出、令和3年定年退職）、安永 秀計 助手（平成4年?着任、後に准教授、「バイオベースマテリアル学専攻」に転出、現職）、綿岡 勲（物質工学科第一期生、第二講座卒、平成20年?着任、「バイオベースマテリアル学専攻」に転出、現在准教授）

浦川先生と綿岡先生が「バイオベースマテリアル学専攻」に転出されたことで、第二講座はほぼ消滅しました。現在も転出先で綿岡先生がその流れを継いでおられます。

第三講座（繊維助剤学講座—界面材料学研究室）：

昭和50年代：寺村 一広 教授（平成2年定年退官）、林 良之 助教授（後に教授、平成11年定年退官）、長野 与志夫 助手（色染 昭和43年卒、平成5年退官）、清水 富男 技官（色染 昭和49年卒、後に、助手、助教授、准教授、平成29年定年退職）

平成年間：寺村 一広 教授、林 良之 教授、福西 教授、長野 与志夫 助手、清水 富男 助手
(以上 前述)、老田 達生 技官 (冒頭に詳述)、川瀬徳三 教授 (平成 15 年着任、平成 28
年に定年退職) 杉本 正勝 技官 (平成 7 年着任、平成 10 年繊維学部デザイン経営工学科に
転出、平成 24 年?に退職)

老田の定年退職に伴い、第三講座は消滅しました。(研究室の実験装置、器具、薬品すべてを
処分しました)

第四講座 (捺染学・加工学—有機材料加工学研究室) :

昭和 50 年代：寺主 一成 助教授 (後に教授、昭和 63 年定年退官)、脇田 登美司 助教授 (色
染 昭和 29 年卒、後に教授、平成 7 年定年退官)、奥田 福之助 講師 (色染 昭和 12 年卒、
昭和 54 年定年退官)、河村 晴夫 助手 (色染 昭和 50 年卒、平成 4 年退官) 田村 実 技官
(色染 昭和 24 年卒、昭和 60 頃退職)、

平成年間：脇田 登美司 (前述)、上田 充夫 助教授 (その後教授に、平成 10 年に繊維学部
新設された「デザイン経営工学科」に転出、平成 25 年?他大学に転出) 河村 晴夫 助手 (前
述)、佐藤 哲也 助手 (色染 昭和 55 年卒、平成 5 年に着任、講師を経て「デザイン経営工
学科」に転出、その後、助教授を経て教授、平成 30 年に新しく統合された「デザイン・建
築学課程」に移動、令和 5 年定年退職予定)

上田先生と佐藤先生の「デザイン経営工学科」への転出で、ほぼ第四講座は消滅。佐藤先生
から後述の北口先生へと、その流れを「色彩・感性工学研究室」として継いでおられます。

現在、京都工芸繊維大学に色染工芸学科 (あるいはその流れを汲む研究室) を卒業した現役
教員は、綿岡先生を含め合計 4 名おられます。

三村 充 助教 (情報工学・人間科学系, デザイン・建築学課程) : 平成 3 年色染工芸学科卒業
(第二講座)、平成 16 年に本学に着任 (情報工学・人間科学系, デザイン・建築学課程)

布施 泰朗 准教授 (分子化学系・環境科学センター) : 平成 6 年 物質工学科卒業 (第三講座)。

平成 8 年、技官に着任、その後、助教を経て現職

北口 紗織 准教授 (情報工学・人間科学系, デザイン・建築学課程) : 平成 13 年 物質工学科
卒業 (第四講座)。平成 26 年、助教に着任 (情報工学・人間科学系, デザイン・建築学課程)

他大学に目を向けると、現役で教員をされている卒業生も、私の存じ上げている限りでは 9
名おられます。

- ・大森 雅人 先生 : 昭和 60 年卒業 (第四講座) 神戸常盤大学教育学部 教授
- ・星野 裕之 先生 : 昭和 62 年卒業 (第二講座) 山口大学教育学部 教授
- ・解野 誠司 先生 : 平成元年卒業 (第四講座) 椋山女学園大学生生活環境デザイン学科 教授
- ・貝増 匡俊 先生 : 平成元年卒業 (第四講座) 神戸女子大学家政学部家政学科 准教授
- ・湯口 宜明 先生 : 平成 4 年卒業 (第二講座) 大阪電通大学工学部環境化学科 教授
- ・澤田 和也 先生 : 平成 6 年卒業 (第四講座)、大阪成蹊大学生生活デザイン学科 教授

- ・安川 涼子 先生：平成 13 年卒業（第二講座）、京都ノートルダム女子大学 准教授
- ・松原 孝典 先生：平成 21 年卒業（第二講座）。産業技術短期大学機械工学科 講師
- ・横山 創一 先生：平成 22 年卒業（第二講座、博士前期課程を第三講座）大阪大学産業科学研究所 助教

過去においては、もっと多くの方々が大学教員として活躍されていました。（今回は、平成以降の記録ということで、申し訳ないのですがすでに退職されている方は、割愛させていただきました。）

大学に限らず、色染工芸学科（その流れを汲む研究室を含め）の卒業生の多くの方々が、多くの場所で活躍されています。特に「社会貢献」という意味で目立って活躍されていると思います。

現在、京都工芸繊維大学だけでなく、日本のほとんどの大学が置かれた環境は、私が学生の時に比べて非常に厳しい状況と言わざるを得ません。私が学生の色染工芸学科の当時は、ひとつの研究室＝講座に約 4 人の教職員がいて、日々の業務を分担していました。これがほとんどの大学の標準でした。しかし、現在では多くの大学（一部の研究室を除いて）では、一人もしくは二人の教員だけの研究室がほとんどです。

現在、京都工芸繊維大学は法人化（平成 16 年）されて「国立大学法人」となっていて、国から定期的に支給される「運営交付金」は継続的に減少しております。そのため、各教員（すなわちその研究室）の研究費は毎年少なくなっています。ですので、「競争的研究費」を獲得しなくては、良い研究環境を維持できません。その努力にかなりの時間を割かれます。また「助教」などの定員が少なく、さらに「任期制」等のことがあって、若手の人は少なくなっています。さらに、教員の定年延長もあって、教員の平均年齢は高くなる一方です。私は最後の 3 年間は、私一人で研究室を切り盛りしました。入試委員などの大学の役職、それに所属学会の役職がここに重なります。私の能力不足を棚に上げますが、学生への教育や研究に手が回らなくなっていたと言われても、反論が難しいです。私個人の意見ですが、日本の大学の環境は悪くなる一方で、特に学生を含め若手の育成の面では問題が多いと言わざるを得ません。その結果、世界とのギャップが大きくなる一方だと思い、心配です。

私の個人的な意見ですが、大学には 2 つの大きな社会的使命があると思います。一つは、二十歳前後の重要な青年期の人々の教育で、今や大学への進学率は約 60%にもなっております。もう一つは、社会の将来を支える「研究」です。いずれも日本の将来を支える大切な仕事で、大学にしかできないと思います。昭和までの時代には、進学率も、技術の熟成度もそれほど高くなく、2 つの使命をこなすことは十分可能でした。しかし、学生数の増加や多様性に対応して教育を行うのは簡単なことではなくなりました。また科学的・文化的進歩が進み、熟成度が高くなってきている現代では、更なる先進的な研究を行うのは難しくなっています。ですので、この 2 つを区別するシステムが必要ではないかと思っております。（明確な区別はむしろ弊害が多くなるとおもいます。オーバーラップする区別が私は良いと思います。）

むろん、この2つには接点はありますし、いわゆるブレイクスルーは、先進的な研究を行っている研究室ではないところから出てくることが多いと思います。大学の将来的な流れは「二極化」の方向に向かっていると思いますが、なかなかうまくいっているとは思えないのが現状と思います。

大学は「日々変革し、新しくならなければならない。」との掛け声で、「歴史ある研究室を継続するのは良くない。」との雰囲気が多勢を占めています。我が「色染工芸学科」も、僅かにその流れを汲む先生が残っておられますが、ほぼ壊滅したと言っていいでしょう。色染工芸学科と同等の歴史を持つ「無機材料工学科(その前は窯業学科)」も、令和5年3月に2人、令和6年に1人の「無機材料学科」出身の教員が定年退職を迎え、これで、この学科の流れを汲む研究室がほぼなくなります。(本学の無機系は純粋無機系ではなく「セラミック科学」ですので、これから日本社会で重要視される分野と思うのですが、残念です。)私は、決して「古いから悪い」とは思いません。何事も刷新は必要ですが、「Scrap & Build」の「Scrap」だけが目立ち、何を「Build」するのがしっかりしていなければ、弊害が目立つだけになると思います。古くからある「技術」は、それが複雑すぎて、「科学的」に解析できない(学問?にならない)だけで、もしかすると、最新の技術を用いて解明できれば「先進的」な分野に、あるいは思わぬ分野に展開できることになると思うのです。すなわち、一見「古めかしい」技術を保持し、進歩させることは、将来に大いなる光をもたらすと思うのです。(むろん選別は必要ですが) 今となっては、すでに「老兵」になった私の「世迷言」(愚痴)にすぎないです。

全国的に「化学系」の学科への風当たりは厳しく、大学の化学系の学生募集定員の減少、それに伴う大学教員の減少はよく耳にする話です。高校生相手の仕事も良くしておりますが、今の高校生が持っている「化学」に対する評判は、かなり悪いと実感します。これが大学における化学系の地位の低下の一因だと思います。しかし、直近の「就職氷河期」では、化学系はそれほど影響を受けなかったことから考えて、日本において「化学系」は重要視すべき「大学教育の分野」と私は確信しています。私には無関係なってしまった、少し先の日本の「将来」は、私はかなり不安だと思います。

我が色染の所属していた学部は、全国で唯一の「工芸学部」と名乗っていました。私が現役の時には、この「工芸」は、決して伝統工芸ではなく、役に立つが人には冷たい「工学」と、役には立たないが人には温かい「芸術」とを融合した先進的な「分野」と標榜し、頑張っておりました。しかし残念ながらこの概念は、世間一般には認められませんでした。本学においても、「工芸学部」と「繊維学部」を廃し、合体した「工芸科学部」の単科大学になったときに、この「工芸」の概念はどこかに行ってしまったようです。

我が母校は、世界的に有名な「京都」の、「名」も「歴史」もある小さな(ジャストサイズ)

理系の大学、「京都マインド」「京都ブランド」を持つ理系の大学と言う、大きな特色を持ち、唯一無二の大学と思っておりました。しかし、このままでは消えてなくなってしまうのではと心配せざるを得ません。この心配をせざるを得なくなった状況を生み出した張本人の一人との認識はありますが、抗うことは出来ずに退職してしまいました。申し訳ありませんでした。

最後になって申し訳ないのですが、色染工芸学科の変遷を調べる際に、現在大学の現役の教員をされている佐藤哲也先生、綿岡勲先生に色々と助けていただいたことを、お礼申し上げます。

以 上